私小説 名作選 上

中村光夫［選］
nakamura mitsuo

日本ペンクラブ 編

田山花袋 *tayama katai*
徳田秋声 *tokuda shūsei*
近松秋江 *chikamatsu shūkō*
正宗白鳥 *masamune hakuchō*
志賀直哉 *shiga naoya*
嘉村礒多 *kamura isota*
梶井基次郎 *kajii motojirō*
太宰治 *dazai osamu*
梅崎春生 *umezaki haruo*
井伏鱒二 *ibuse masuji*
尾崎一雄 *ozaki kazuo*
上林暁 *kanbayashi akatsuki*
木山捷平 *kiyama shōhei*
和田芳恵 *wada yoshie*
井上靖 *inoue yasushi*

講談社文芸文庫
Kōdansha Bungei bunko

私小説名作選 上

中村光夫[選]
日本ペンクラブ 編

常州大学図書館
藏书章

講談社 文芸文庫

私小説名作選 上
中村光夫 選　日本ペンクラブ 編
二〇一二年五月一〇日第一刷発行

発行者——鈴木 哲
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2・12・21 〒112-8001
電話 編集部（03）5395・3513
販売部（03）5395・5817
業務部（03）5395・3615

デザイン——菊地信義
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社国宝社
本文データ制作——講談社デジタル製作部
©Kodansha bungeibunko 2012, Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合せは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

講談社
文芸文庫

ISBN978-4-06-290158-1

目次

少女病　田山花袋　七
風呂桶　徳田秋声　二九
黒髪　近松秋江　三七
戦災者の悲しみ　正宗白鳥　八〇
城の崎にて　志賀直哉　九七
崖の下　嘉村礒多　一〇六
檸檬　梶井基次郎　一三七
富嶽百景　太宰　治　一四六
突堤にて　梅崎春生　一七三

鯉　井伏鱒二　一八七
虫のいろいろ　尾崎一雄　一九四
ブロンズの首　上林　暁　二一一
耳学問　木山捷平　二三九
接木の台　和田芳恵　二四七
セキセイインコ　井上　靖　二六五
著者紹介　二七七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

私小説名作選 上

nakamura mitsuo
中村光夫［選］
日本ペンクラブ 編

講談社 文芸文庫

目次

少女病　田山花袋　七
風呂桶　徳田秋声　二九
黒髪　近松秋江　三七
戦災者の悲しみ　正宗白鳥　八〇
城の崎にて　志賀直哉　九七
崖の下　嘉村礒多　一〇六
檸檬　梶井基次郎　一三七
富嶽百景　太宰　治　一四六
突堤にて　梅崎春生　一七三

鯉　井伏鱒二　一八七
虫のいろいろ　尾崎一雄　一九四
ブロンズの首　上林　暁　二一一
耳学問　木山捷平　二三九
接木の台　和田芳恵　二四七
セキセイインコ　井上　靖　二六五
著者紹介　二七七

私小説名作選

上

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

少女病

田山花袋

一

山手線の朝の七時二十分の上り汽車が、代々木の電車停留場の崖下を地響させて通る頃、千駄ケ谷の田畝（たんぽ）をてくてくと歩いて行く男がある。此男の通らぬことはいかな日にも無いので、雨の日には泥濘の深い田畝道（たんぼみち）に古い長靴を引ずって行くし、風の吹く朝には帽子を阿弥陀（あみだ）に被って塵埃（ほこり）を避けるようにして通るし、沿道の家々の人は、遠くから其姿を

見知って、もうあの人が通ったから、貴郎御役所が遅くなりますなどと春眠いぎたなき主人を揺り起す軍人の妻君もある位。

此男の姿の此田畝道に顕れ出したのは、今から二月ほど前、近郊の地が開けて、新しい家作が彼方の森の角、此方の丘の上に出来上って、某少将の邸宅、某会社重役の邸宅などの大きな構が、武蔵野の名残の欅の大並木の間からちらちらと画のように見える頃であったが、其欅の並木の彼方に、貸家建の家屋が五六軒並んであるというから、何でも其処等に移転して来た人だろうとの専らの評判。

何も人間が通るのに、評判の立てる程のものは無いのだが、淋しい田舎で人珍らしいのと、それに此男の姿がいかにも特色があって、そして鶩の歩くような変てこな形をするので、何とも謂えぬ不調和——その不調和が道傍の人々の閑な眼を惹くの基となった。

年の頃三十七八、猫背で、獅子鼻で、反歯で、色が浅黒くッて、頬髯が煩さそうに顔の半面を蔽って、鳥渡見ると恐ろしい容貌、若い女などは昼間出逢っても気味悪く思う程だが、それにも似合わず、眼には柔和なやさしいところがあって、絶えず何物をか見て憧れて居るかのよう。足のコンパスは思切って広く、トットと小きざみに歩くその早さ！　演習に朝出る兵隊さんもこれにはいつも三舎を避ける。

大抵洋服で、それもスコッチの毛の摩れてなくなった鳶色の古背広、上にあおったインバネスも羊羹色に黄んで、右の手には狗の頭のすぐ取れる安ステッキをつき、柄にない海

老茶色の風呂敷包をかかえながら、左の手はポッケットに入れて居る。

四ツ目垣の外を通懸ると、

『今お出懸けだ！』

と、田舎の角の植木屋の主婦が口の中で独語ちた。

其植木屋も新建の一軒家、売物のひょろ松やら樫やら黄楊やら八ツ手やらが其周囲にだらしなく植付られてあるが、其向うには千駄ケ谷の街道を有せる新開の屋敷町が参差として連って、二階の硝子窓には朝日の光が閃々と輝き渡る。左は角筈の工場の幾棟、細い烟筒からはもう労働に取懸った朝の烟がくろく低く靡いて居る。晴れた空には林を越して電信柱が頭だけ見える。

男はてくてくと歩いて行く。

田畝を越すと、二間幅の石ころ道、柴垣、樫垣、要垣、其絶間絶間に硝子障子、冠木門瓦斯燈と順序よく並んで居て、庭の松樹に霜よけの縄のまだ取られずに附いて居るのも見える。一二町行くと、千駄ケ谷の通で、毎朝、演習の兵隊が駆足で通って行くのに邂逅する。西洋人の住める大きな洋館、新築の医者の構えの大きい門、駄菓子を売る古い茅葺の家、此処まで来ると、もう代々木の停留場の高い線路が見えて、新宿あたりで、ポーと電笛の鳴る音でも耳に入ると、男は其の大きな体を先へのめらせて、見得も何も構わずに、一散に走るのが例だ。

今日も其処に来て耳を欹てたが、電車の来たような気勢も無いので、同じ歩調ですたすたと歩いて行ったが、高い線路に突当って曲る角で、ふと栗梅の縮緬の羽織をぞろりと着た恰好の好い庇髪の女の後姿を見た。鶯色のリボン、繻珍の鼻緒、おろし立ての白足袋、それを見ると、もう其胸は何となく時めいて、其癖何うの彼うのと言うのでもないが、唯嬉しく、そわそわして、其先へ追越すのが何だか惜しいような気がする様子。男は此女を既に見知って居るので、少くとも五六度は其女と同じ電車に乗ったことがある。それどころか、冬の寒い夕暮、わざわざ廻り路をして其女の家を突留めたことがある。千駄ケ谷の田畝の西の隅で、樫の木で取囲んだ奥の大きな家、其の総領娘であることをよく知って居る。眉の美しい、色の白い、頬の豊かな、笑う時言うに言われぬ表情を其眉と眼との間にあらわす娘だ。

『もう何うしても二十二三、学校に通って居るのではなし……それは毎朝逢わぬのでも解るが、それにしても何処に行くのだろう』と思ったが、其思ったのが既に愉快なので、眼の前にちらつく美しい衣服の色彩が言い知らず胸をそそる。『もう嫁に行くんだろう?』と続いて思ったが、今度はそれが何だか侘しいような惜しいような気がして、『己も今少し若ければ……』と二の矢を継いだが、『何だ馬鹿馬鹿しい、己あ幾歳だ、女房もあれば子供もある』と思返した。思返したが、何となく悲しい、何となくなつかしい、何となく嬉しい。

代々木の停留場に上る階段の処で、それでも追越して、衣ずれの音、白粉の香に胸を躍したが、今回は振返りもせず、大足に、しかも駆けるようにして、階段を上った。

停留場の駅長が赤い回数切符を切って返した。此駅長も其他の駅夫も皆な此大男に熟して居る。性急で、慌て者で、早口であるということをも知って居る。

板囲いの待合所に入ろうとして、男はまた其前に兼ねて見知越の女学生の立って居るのを眼敏くも見た。

肉附きの好い、頬の桃色の、輪廓の丸い、それは可愛い娘だ。派手な縞物に、海老茶の袴を穿いて、右手に女持の細い蝙蝠傘、左の手に、紫の風呂敷包みを抱えて居るが、今日はリボンがいつものと違って白いと男はすぐ思った。

此娘は自分を忘れは為まい、無論知ってる！　と続いて思った。そして娘の方を見たが、娘は知らぬ顔をして、彼方を向いて居る。あの位の中は耻しいんだろう、と思うと堪らなく可愛くなったらしい。見ぬような振をして幾度となく見る、頻りに見る。――そしてまた眼を外して、今度は階段の処で追越した女の後姿に見入った。

電車の来るのも知らぬという風。

二

此娘は自分を忘れは為まいと此男が思ったのは、理由のあることで、それには面白い一小挿話があるのだ。此娘とは何時でも同時刻に代々木から電車に乗って、牛込まで行くので、以前からよく其姿を見知って居たが、それと謂って敢て口を聞いたと謂うのではない。唯相対して乗って居る、よく肥った娘だなアと思う、あの頬の肉の豊かなこと、乳の大きなことも、立派な娘だなどと続いて思う。それが度重なると、笑顔の美しいことも、耳の下に小さな黒子のあることも、混雑た電車の吊皮にすらりとのべた腕の白いことも、信濃町から同じ学校の女学生とおりおり邂逅して蓮葉に会話を交ゆることも、何も彼もよく知るようになって、何処の娘かしらん？　などと、其家、其家庭が知り度くなる。

でも後をつけるほど気にも入らなかったと見えて、敢てそれを知ろうとも為なかったが、ある日のこと、男は例の帽子、例のインバネス、例の背広、例の靴で、例の道を例のごとく千駄ケ谷の田畝に懸って来ると、不図前から其肥った娘が、羽織の上に白い前懸をだらしなくしめて、半ば解き懸けた髪を右の手で押えながら、友達らしい娘と何事をか語り合いながら歩いて来た。何時も逢う顔に違った処で逢うと、何だか他人でないような気がするものだが、男もそう思ったと見えて、今少しで会釈を為るような態度をして、急い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com